

# 『純粹理性批判』における感覚と対象

岩井 拓朗

## 1. はじめに

本稿の目的は『純粹理性批判』（以下『批判』）においてカントが認識の対象を考察する方針の一貫性を明らかにすることにある。私たちの認識活動を分析するにあたって、認識の対象はどのようなものとして考えられるべきか。この問いに対して『批判』は一定の解答を与えているように思われる。その際カントは認識の対象と私たちの認識能力とを不可分なものとする方法を採用しているため、件の問いは認識の対象に相關する能力の考察と結びつくことになる。後に明らかにするように、カントがそうした能力として中心に据えるのは判断を下す自発的な能力としての悟性である。したがって認識の対象はいわば判断の対象として特徴づけられることになる。しかし受動的な能力としての感性に関する記述は、彼のこの姿勢の一貫性に疑念を抱かせる。彼は感性が受動的な能力であることを説明する際に、触発という語を用いて、受動的な能力に因果的に相關するものを認識の対象としているように思われるからである。もしこの二面性が残されているならば、『批判』の中には次のような二つの考えが同居していることになる。一方は判断を下す能力をもつ主体が会うことができるものを認識の対象とする考えであり、他方はそうした能力を欠いていたとしても、外からの因果的な作用に反応できる主体であれば出会えるようなものを認識の対象とする考えである。事態は次のようにも表現される。認識活動において対象と会うことができるために、カントは主体に特定の認識能力を要求する。しかしその要求は一見したところ対立しており、一方では判断能力が要求されているのに対し、他方では判断能力なしでも成立する受動的な能力で十分だとされているように思われる。こうした状況に対して本稿はこの対立がそもそも存在せず、カントは前者の考えを一貫して採用し、認識の対象を判断する能力の下で考えていたと述べる予定である<sup>1</sup>。

以下が本稿の構成である。まずは認識の対象に関するカントの姿勢が触発をめぐって問題となる背景を整理する。そしてこの問題が感覚の位置づけという形で表面化することを整理し、本稿の課題を明確にする（第2節）。次いで感覚と直観に関する区別を整理し、この区別が維持されていればカントが判断する能力の下

で対象を考える姿勢を一貫させていると言えることを示す（第3節）。最後はカントが感覚と直観の区別を緩めてしまっているように思われる「知覚の予料」を検討し、そこでもやはり彼が件の姿勢を一貫させていることを明らかにする（第4節）。

## 2. 触発の問題とは何か

本稿が扱う問題はいわば『批判』の方針と触発との相性に関わる問題であり、それは物自体の問題とは独立に扱われうるものである。ここで物自体の問題として念頭に置いているのは、物自体を触発するものとして考えることで、カテゴリーの使用に課した制限をカントが自ら越えてしまっているように見えるという問題である。事実カント解釈において触発の問題は、しばしばこのような問題として扱われており<sup>2</sup>、その対処法としては「物自体」概念の吟味によって触発をめぐる語りを合法化しようとするものが多く見られる。この反応も一様ではなく、私たちの認識から隔絶して存在するものとして物自体を実体化する解釈や、実体化の側面を弱め、ある種の想定物として物自体を捉える解釈など、複数の解釈がある<sup>3</sup>。ただ物自体に関して異なる見解を抱いていたとしても、触発するものの位置づけを問題の本質と考え、それをめぐる語りを合法化する術を模索している点でこれらの反応は共通していると言える。しかし、本稿が扱うのは問題の異なる側面である。それは物自体の問題として触発の問題が解決されたとしてもなお問題として残りうるものなのである<sup>4</sup>。

### 2. 1 認識能力に関する触発の問題

本稿が触発との緊張関係を見出すのは、認識の対象と私たちの認識能力の関係に関するカントの以下のような考えである。悟性のはたらきを分析する中で彼は経験の成立にカテゴリーが不可欠だという結論に到達する<sup>5</sup>。カテゴリーとは悟性の中心的なはたらきを表したものであり、それは悟性が判断を形成するはたらきと結びつけられている。つまりカテゴリーは判断を下す能力の中心的なはたらきを表すものだということになる。例えば対象の量を測定するはたらきや、原因と結果の関係を把握するはたらきなどがそこには数え入れられている。したがってカテゴリーが経験に不可欠ということは、判断を下す能力のない主体にとって経験は成立しないということを意味するだろう。

ところで経験は複数の知覚の連結によって成立するものだとカントは述べてい

る<sup>6</sup>。加えて経験は認識の対象を見出す唯一の契機だとされている。これは彼の次のような文言に現れている。

対象が概念に与えられるのは、直観において以外にはありえず、純粹直観が対象に対してアприオリに可能であるとしても、それでもこの純粹直観自身もまた自らの対象を、それゆえ客観的妥当性を、自らがその単なる形式であるところの経験的直観を通じてのみ受け取ることができる。それゆえすべての概念そしてそれとともにすべての原則は、たとえアприオリに可能であったとしても、それにも関わらず経験的直観に、すなわち可能的経験に対する与件に関係する。(A239/B298)

ここでは対象を与えることがすべて経験においてのみなされることが述べられている。それはたとえ経験から独立して考えられる純粹直観という特殊な表象やアприオリに成立しているような原則であっても変わらない<sup>7</sup>。このように経験とは複数の知覚によってなされ、認識の対象を見出す唯一の契機だとされている。具体的には認識活動において問題となっているものを、見たり触ったりして見出すことを考えればよい。まとめると次のようになる。対象を見出す唯一の契機としての経験はカテゴリーを欠いては成立せず、カテゴリーは私たちの判断する能力に基づいている。したがって判断を下す能力を備えた主体のみが、認識の対象を見出すことができるという考えをカントに見出すことができるだろう。

このように判断を下す能力と認識の対象を不可分に考えることの帰結は次のような引用から窺うことができる。

真理も誤謬も、それゆえ誤謬へと誘うものとしての仮象もただ判断においてのみ、すなわち私たちの悟性に対する対象の関係においてのみ見出されうるのである。(A293/B350)

ここでカントは対象が悟性と関係しているとき初めて、その対象についての真理や誤謬という事態が成立すると述べている。したがって認識の対象を見出すことを判断する能力の下で考えるという彼の方針が意味するのは、私たちの判断の真偽に関わるものとして認識の対象を考えるということになるだろう。このことは、判断が一般に真であることを目指すものであり、認識活動においてはその真偽が問題になるという私たちの常識にも適っているように思われる。

しかし触発をめぐる語りはこれとは異なる方針を『批判』に見出すように誘う。まず触発は「私たちが諸対象によって触発される仕方を通じて諸表象を受け取る性能（受容性）は感性と呼ばれる」（A19/B33）という形で、私たちの感性の受動性を表す際に登場している<sup>8</sup>。感性が因果的な刺激という仕方対象に相関するということを、これは意味するようと思われる。そしてカントはこれを悟性が考慮されない「超越論的感性論」（以下「感性論」）の段階で述べている。このことからカントが触発という語によって、判断能力を欠いた感性の段階で、因果関係によって認識の対象を指定しているように考えられるのである。換言すれば、外部に因果的に反応する能力を基準に認識の対象を導入する考えがカントに見出され、そこには判断を下す能力の考察が登場しないように思われるのである。これは明らかに先の方針と衝突するだろう。

以上をまとめると、認識に関わる対象がどのようなものであるのかという問いに対してカントは二つの異なる考えを抱いているように思われる。一方では判断を下す能力を備える主体が初めて関わることができるものが対象とされているように思われる。その際、認識活動において問題となる対象は判断の真偽決定に関わるものということになる。しかし他方で、判断を下す能力なしに受動的な認識能力だけで関わることができるものが認識の対象とされているように思われる。こちらの場合は判断の真偽ではなく、因果関係によって主体と相関するものが対象として扱われることになる。これが触発と『批判』の方針の衝突であり、本稿が扱う問題である。これは主体の能力の観点から次のように表現することもできる。カントは主体が認識活動において対象と関わることができるために、判断を下す能力を主体に要求する。しかし他方で彼は判断能力を欠いていても外からの刺激に反応できる能力さえあればよいと言っているように見える。この二つの異なる考えが『批判』に見出されるように思われるのが問題である。もしこれらの考えがカントにおいて本当に対立しているのであれば、私たちはいずれかの考えを採る代わりに他方を退け、『批判』の再構成を行わなければならないだろう。このように本稿が扱う触発の問題とは認識対象に出会うために要求される能力に関する問題だと言える。

## 2. 2 触発の問題と感覚の位置づけ

ここまでで認識能力の問題としての触発の問題が明らかになった。しかし触発に関わる議論全般と『批判』の方針との衝突を取り上げ、解決することは課題としてあまりに大きすぎる。ところで、この問題は感覚が外的対象の触発の結果だ

とされていることから<sup>9</sup>、次のような仕方では感覚の位置づけに関する問題としても際立ってくる。カントは判断能力のもとで初めて出会われるものを対象と呼びながらも、他方でそうした能力を欠く主体でも得られるような感覚のレベルで認識の対象を考えているように思われる。そこで本稿は触発の問題がこのような形で感覚の位置づけに関して際立ってくる場面に話題を限定することにする。

こうした問題に関する研究として例えばウェストファルは、感覚のレベルで認識の対象を考える路線を押し進めるような解釈を提示している。しかしやはり彼の解釈はカントが『批判』で提示する体系の大規模な再構成を要求するものである<sup>10</sup>。彼がカントから取り出そうとするモデルの是非はともかくとして、これに対して本稿はカントが感覚に関して述べている考えを正確に理解すれば、大規模な再構成を伴わずとも先の問題に対処できることを示す。

### 3. 感覚と直観

感覚が問題となる場面でもカントは認識の対象を考える際に判断能力を中心に据える姿勢を一貫させている。このことを示すために本節では、ともに感性に関わる表象でありながら、直観が対象に関わるとされているのに対して感覚はそうではないとされていること、そしてこの区別の背景に判断能力のはたらきの有無があることを明らかにする。

#### 3. 1 時間空間を形式とする直観

カントは直観を対象に直接関係する表象として特徴づけ、それに対して感覚を主観の状態の変容として単に主観にしか関わらないとしている<sup>11</sup>。そしてこの相違の内実は時間空間に対する両者の関係を踏まえることで理解される。まず直観はその形式が時間空間だとされている<sup>12</sup>。具体的にカントが考えているのは、例えば空間の場合以下のようなものである。

(私たちの心の一つの固有性の) 外的感官を介して、私たちは諸対象を自らの外のものとして、そしてこれらの諸対象を総じて空間において表象する。そこにおいては諸対象の形、大きさ、互いの関係が規定される、もしくは規定されうる。(A22/B37)

このように空間においては対象の大きさや形、対象同士の関係などが把握される

とカントは言う。したがってカントが外的対象の直観として考えているのは、対象の大きさや形、それが占めている場所等を把握していることだと言える。これに対してカントは感覚が時間空間的要素をもたないものだとしている<sup>13</sup>。したがって感覚は直観が備えるとされる上記のような把握を伴わないものだということになる。こうした違いが、客観的对象への関係の有無の内実として理解できるだろう。

もちろん感性に由来する直観が感覚的要素を伴うことは否定できない。色や手触りなどを手がかりに対象を把握することは私たちが日常的に行っていることだからである。しかし直観形式としての時間空間という考えから窺われるように、カントは対象の直観を、上記のような秩序づけによって時空的に局在するものとして対象を捉えることとして考えているのであり、単に色の感覚や触感などを有しているだけの状態から区別しているのである。このように形式としての時間空間の有無によって直観と感覚は区別され、前者は客観的对象に関わるとされているのに対し後者はそうした性質を欠くとされている。

更に客観的对象への関係と時間空間的要素の有無のこの対応は、実は判断能力のもとで認識の対象を考える方針と親和的である。このことを理解するためには感覚の話題から少し離れ、時間空間とカテゴリーの関係が明らかにされている「直観の公理」を取り上げる必要がある。

### 3. 2 時間空間とカテゴリー

「直観の公理」では直観形式としての時間空間と量のカテゴリーの関係が示される。それは原則の「証明」部分に該当する。以下はその一部である。

すべての現象は、形式から見て、空間と時間における直観を含んでおり、この直観は現象の根底にことごとくアプリアリに存しているものである。したがって現象が把握されるのは、すなわち経験的意識へと取り入れられるのは、規定された空間または時間の諸表象を産み出す、多様なものの総合を通じて以外にはありえず、すなわち同種的なものの合成とこの多様なもの（同種的なもの）の総合的統一の意識を通じて以外にはありえない。(B202-3)

まず、現象とは基本的に私たちが実際に見たり触ったりすることでアクセスできるような対象だと考えてよい<sup>14</sup>。そして直観は私たちが対象にそのようにアクセスした際に得られる表象である。また時間空間における直観が現象の基礎にある

とされているのは、そうした直観が対象の把握に必要なだとされた「感性論」を踏まえてのことである。すると一文目の趣旨は、私たちがアクセスできる対象はその表象として対象の把握に必要な時間空間における表象をもつ、ということになる。具体的には例えば目の前のコップを見出す場合、私はコップが自分の前にサイズや形をもって空間的に存在していることを把握している、ということである。

二文目ではこれを受けて、私たちがそのようにして対象にアクセスして表象を得る際には、表象の時間的または空間的な内容を支える悟性のはたらき、つまり総合が必要であると言われている。総合が認められるのが、時間的空間的な対象を意識に取り込む場面ではなく、対象を意識に取り込んで時間的ないし空間的に表象する場面であることには注意が必要である。このことは時間及び空間が表象であるところの直観に関して言及されており、対象について言及されているのではないこと、加えて総合が「空間または時間の諸表象を産み出す」という形で表象を得る場面に即して導入されていることなどから明らかである。例えば、コップを空間の中にあるものとして、先の例だと自分の前にサイズをもってあるものとして把握するには、悟性のはたらきが必要だということである。そしてこの後にこの総合が量の概念と関わることが示される。形式的ではあるものの、これによって対象の時間空間的な表象が量のカテゴリーの下で成立することが示されたことになる。

このようにカントは直観が時間空間的な要素をもつことを判断する能力としての悟性のはたらきに帰している。そして先述のように直観は感覚とは異なり、客観的对象に関係する性質を備えていた。ここから読み取ることができるのは、カントが直観と対象との関係を考える際に、時間空間という直観形式を介し、最終的には判断能力のもとで客観的对象への関係を考えているということである。したがって直観と感覚の区別はまさに、判断能力の下で認識の対象を考える方針の一つの帰結として理解できるだろう<sup>15</sup>。

### 3. 3 主観的表象としての感覚

ここまで感覚と直観の違いを、直観形式と悟性のはたらきの観点から整理した。そこで言われたのは、感覚は時間空間的要素を欠く点で直観とは異なり、またそれによって客観的对象への関係をもたないとされているということだった<sup>16</sup>。触発の問題に対処するためには基本的にこのことを踏まえておけば十分であるものの、ここで本稿の立場について少し述べておかなければならないことがある。それは感覚が時間空間的要素を欠くことの理解に関わるものである<sup>17</sup>。

さて例えば色の感覚などを考えてみると、何の形ももたない色を思い浮かべることができないように思われる。しかしカントは感覚の例として色を挙げながらも、そこに時間空間的要素がないと主張している。こうした主張を理解するために、感覚を一種の想定物のようなものとして考えようとする解釈が提示されている。例えばマクダウェルは、空間的要素を伴った直観からまさにそうした要素を捨象して残るものが感覚であるという考えをカントから取り出そうとする<sup>18</sup>。このように考えることができれば、私たちが実際に出会うのはすべて形を備えた色であったとしても、形のない色感覚というものを考えることができるように思われる。私見ではこの立場は一定の説得力をもっていると思われるものの、残念ながらこの点について本稿ではこれ以上決定的なことは言えない。なぜならこの問題は空間的要素の成立に要求されるものの考察と結びついているからである。ただし先に述べたように本稿の目的のためには、客観的対象への関係をもたないような弱いものとして感覚が考えられている点を理解すれば十分である。したがって感覚が想定物であるかどうかに関して本稿は特定の立場にコミットするものではない。

さてこれまでの整理から、感覚は対象を見出す場面において何らかの手がかりとなることはあっても、それ単独で扱われた場合には客観的対象への関係をもたないものだとされていた。もしカントがこの区別に整合的な説明を展開しているのであれば、感覚のレベル、つまり判断する能力のない主体でも関与することができるレベルでは認識の対象を考えていないということになるだろう。つまりカントは触発の問題を回避していることになる。しかしまさに問題はここにある。カントは先のような区別を主張する一方で、感覚について語る際に不透明な言い方をしているのである。そこで次節ではそうした記述が登場している「知覚の予料」(以下「予料」)を検討する。

#### 4. 「予料」と感覚

これまでの考察の結果、直観と感覚の区別を踏まえればカントが自らの方針に反する行いをしている訳ではないと思われることが明らかになった。しかしこうした区別にも関わらずやはり感覚と因果的に連関するものを対象と呼んでいるように思われる箇所が「予料」に見られる。そこで本節では当該箇所でもカントの議論が判断する能力の下で対象を考える方針を維持していることを明らかにする。

#### 4. 1 「予料」に潜む疑惑

「予料」でのカントの狙いは、対象の内包量的な規定が可能であることを示すことにある。そして問題となるのは、そこで彼が感覚と因果関係によって対象を考えているように思われることである。この疑惑は以下のようにして生じる。

まず、「予料」でカントが到達する結論は以下のようなものである<sup>19</sup>。

すべての現象において、感覚の対象であるところの实在的なものは内包量を、すなわち度をもつ。(B207)

ここでカントは「感覚の対象」という言い方をしている。これは感覚が対象に関わるものではないとされていたことと整合しないように思われる。

さらにこの結論に到達する過程を踏まえると問題がよりはっきりする。以下はこの結論の「証明」と題された箇所の概要である<sup>20</sup>。まず、知覚は時間空間的要素だけでなく感覚的要素も含んでいる。ところで感覚に関してもある種の量的把握が可能であり、それは内包量的な把握である。そしてこの内包量に対応して、知覚の対象もまた内包量、つまり感官に対する影響の度合いをもつ。内包量の具体例としてカントは色の濃さや物の熱さなどを考えている<sup>21</sup>。これらの量は物のサイズ等の外延量が同じだとしても、なお異なり得るものであるとして外延量から区別されている<sup>22</sup>。ここで問題としたいのは感覚が内包量をもつことから、知覚の対象が内包量をもつことへの推論が行われていることである。このステップはB208の原文においては「対応」(korrespondierend)という語によってなされている。「予料」の後の記述や<sup>23</sup>、感覚が対象の触発によって引き起こされるものだという考えからするとこの「対応」に相当するのは因果関係であると思われる。したがってカントはここで感覚が内包量をもつことから、それと因果的に連関するものが内包量をもつことへと推論していることになる。そして彼はこうした事態を結論において「感覚の対象」という語を用いてまとめているのである。こうしたことを踏まえると「予料」でカントはまさに感覚と因果的に相関するものをその対象と呼んでいることになる。

これは判断する能力の下で対象を考える方針と折り合わないように思われる。カントはここで結局、感覚が因果関係によって相関するものをその対象として扱うことで、判断する能力を介さない次元で感覚に客観的对象への関係を与えてしまっているように見えるからである<sup>24</sup>。しかし私たちはここで撤退する必要はない。「予料」の議論を正確に理解すれば、私たちはウェストファルのような再構成

を行う必要はないのである。

#### 4. 2 「予料」で想定されている場面

本稿の目的のためには「予料」で想定されている場面の理解が必要である。まず注意すべきは、ここでは対象を知覚する場面が想定されているということである。先述の概要で示したように確かにここでは感覚が表立って登場するものの、カントは対象を知覚する場面から話を説き起こしている。それは「証明」の以下の記述から明らかである。

知覚は経験的な意識、すなわちその中に同時に感覚もあるような意識である。知覚の諸対象としての諸現象は、時間と空間のような純粹直観（単に形式的な直観）ではない。[...] したがって諸現象は直観を越えてなお何かある客観一般のための実質を、[...] すなわち単に主観的表象としての感覚の實在的なものを自らの内に含んでおり<sup>25</sup>、この主観的な表象としての感覚は、それについて人は主体が触発されていることを意識しうるに過ぎないものであり、人が客観一般へと関係させるようなものである。(B207)

ここでカントは感覚が含まれている知覚の場面から出発し、その対象が「感覚の實在的なもの」という感覚的要素をもっていること、そして感覚がいかなるものであるのかへと話を進めている。議論が知覚の場面から始まっていることに注意して欲しい。またカントはここで問題になっている対象について「知覚の諸対象として」という限定をつけている。このことは、この箇所でも問題になっている対象がまさに知覚によって把握された対象であることを意味するだろう。そしてこれは感覚と対応するとされる対象に関しても変わらない。

これ [感覚がもつ内包量] に対応して知覚のあらゆる客観には、知覚が感覚を含んでいる限りで、内包量が、すなわち感官に対する影響の度が伴っているのでなければならない。(B208)

この箇所は先に「証明」の概要において取り上げた、感覚からそれに対応する対象への内包量の移行が行われている箇所である。注目すべきは、客観につけられた「知覚の」という限定である。ここでもやはり問題となっているのはあくまで知覚の対象である。つまり感覚に対応して内包量を帰属されるのは、知覚によ

て見出された対象だということになるだろう。

以上のことを踏まえると「予料」では以下のような場面が想定されていると言える。基本的にここでは知覚によって対象を見出す場面が考えられている。そしてそうして見出された対象に関しては、感覚との対応関係に基づいて、内包量的な規定を帰属することができる。具体的には例えば、私が目の前にコップを見出し、そのときに私が感じた白さに基づいてそのコップにある程度の色の濃さを帰属するような場面を想定すればよいだろう。そしてこのような帰属が可能であるためには、私が感じた白さとコップのもつ色の濃さに関して一定の対応関係が成立していることの把握が必要である。例えば私のメガネが白く曇っている場合などは、私が感じている白さとコップの色の濃さに関して対応関係が明らかでないため、そのような帰属が可能ではないように思われるからである<sup>26</sup>。

この検討の結果は「予料」で扱われる質のカテゴリーとしての実在性の概念の意味とも整合するよう思われる<sup>27</sup>。例えば実在性と否定性に関してカントは次のように言っている。

さて経験的直観において感覚に対応するところのものは実在性（フェノメノンの実在性（*realitas phaenomenon*））であり、感覚の欠如に対応するところのものは否定性＝0である。（A168/B209）

もしこの実在性を対象が実際に存在すること、つまり現実性と同じような意味合いで解するならば、対象の直接的な把握においては、感覚に対応するものが対象の実際の存在だとこの引用は述べていることになる。したがってここでは感覚に対応する対象の存在もしくは非存在が問題となっていることになるだろう<sup>28</sup>。しかし「予料」で問題となっている質のカテゴリーとしての実在性の概念が意味するところは、檜垣やジョバネッリらの研究によれば以下のように理解される<sup>29</sup>。ここで登場している実在性とは物の現実性ではなく規定性を意味するものであり、問題となっているのは物が実際に存在するかどうかではなく、どのようなものとして存在しているかである。こうした指摘を踏まえるならば、先の引用は次のように理解される。対象の直接的な把握において感覚に対応するのは、対象の規定性であり、感覚の欠如には対象の規定の欠如が対応する。つまり、感覚に対応するのは対象の存在ではなくその性質であるということになるだろう。このように「予料」においてカントは知覚された対象をどのように規定するか、つまり知覚された対象にどのような性質を帰属するのかを問題にしているのである。これは

「予料」の議論が知覚の場面を想定しているという先の考察と適合するだろう。

こうしたことを踏まえれば「予料」の結論に登場した「感覚の対象」という言葉遣いは確かに不用意なものかもしれないものの、その趣旨は「すべての知覚された対象においては、感覚と因果的に対応するものとしての規定ないし性質は、内包量すなわち度をもつ」という具合に理解されるだろう。

#### 4. 3 上記の考察の帰結

これまでの考察で「予料」が想定している場面が明らかになった。その帰結は「予料」で考えられている対象が、知覚された対象に外ならないということである。基本的に対象への関係は知覚のレベルで確保されている。対象の知覚と、知覚された対象と感覚の間の因果関係とがあって初めて、内包量の帰属、つまり感覚の対象への関係が成立するとされていることは注目に値する。カントは感覚が単体で因果関係のみによって対象に関わるとは考えておらず、常に知覚された対象と感覚の関係を考えているのである。

このことは、カントが判断する能力の下で対象を考える姿勢を維持していることを意味する。残念ながら『批判』における知覚がどのようなはたらきとして想定されているのかを正確に捉えることは難しい。しかしカントが知覚にカテゴリーのはたらきを見出しているのは確かであると言える。例えばカントは「すべての可能的知覚は […] カテゴリーに従わなければならない」(B164)と述べている。したがって対象として知覚される対象を考えるということは、判断する能力の下で対象を考える姿勢として理解されるだろう。「予料」においてカントが対象を知覚された対象に固定し続けているのは、あくまで対象とは私たちの判断する能力の下で理解されるものだという彼の考えの一貫性の現れであることになる。一見すると感覚単体のレベルでカントが対象を考えているように思われた疑惑は晴れたと言えるだろう。

#### 5. 結論と今後の課題

本稿ではカントが判断する能力の下で認識の対象を考える姿勢と触発をめぐる語りとの間に緊張関係を見出し、感覚の位置づけとして表面化する限りでのこの問題に対処してきた。カントが感覚と直観を区別して前者に客観的对象への関係をもたせていないこと、感覚と因果的に相関するものについて語る際にも感覚のレベルで何らかの対象の存在を考えてはいないことを本稿は明らかにした。これ

によりカントは感覚にまつわる問題を回避し、件の姿勢を一貫させていることが明らかになった。しかしこうした洞察は同時に以下のような新たな課題に目を開かせるだろう。本稿の成果は『批判』に同居する次の二つの考えが、他方を浸食していないことを示すものだった。それは判断する活動に相関し、判断の真偽に関わるものを認識の対象とする考えと、私たちがもつ認識能力の一部が外的に刺激されてはたらくという考えの二つである。しかし本稿の成果は両者の関係について積極的な洞察をもたらしてはいない。この二つの考えが同居する形を明らかにするには因果関係や自然科学に関する彼の考えを取り上げる必要がある。また本稿は彼の方針の一貫性を示すことを課題としたため、その帰結として登場するいくつかのアイデア、例えば悟性が対象の時間空間的把握や知覚と関わること、に関しては具体的な検討をしなかった。これらの検討もまた必要である。

---

<sup>1</sup> なお本稿では主に『批判』のB版を中心に取り上げる。私見ではA版でも同様の結論が得られると思われるものの、その検討は別の機会に譲ることにする。

<sup>2</sup> 例えば黒積 (1992, 183) などを参照。

<sup>3</sup> 近年では例えばラングトンの解釈が前者に相当し、アリソンの解釈が後者に当たるだろう。詳しくはLangton (1998) やAllison (2004, 51-7) を参照。

<sup>4</sup> もちろん触発をめぐる語りを合法化する際にカントの方針との相性が踏まえらるのであれば、本稿が扱う問題もまた解決されることになるだろう。

<sup>5</sup> 例えばA128やB167を参照。

<sup>6</sup> A156/B195やB161などを参照。

<sup>7</sup> A155-6/B194にも同様の点を強調する記述が見られる。

<sup>8</sup> この引用における傍点は原文太字である。

<sup>9</sup> A19-20/B34を参照。

<sup>10</sup> 感覚が対象への関わりをもつことが『批判』の方法では十分に捉えられないとして、その再構成を要求する。Westphal (2004, chap. 3) を参照。

<sup>11</sup> A19/B33やA320/B376-7を参照。

<sup>12</sup> 例えば空間に関してはA26/B42、時間に関してはA33/B49-50をそれぞれ参照。

<sup>13</sup> 例えば「感覚それ自身はいかなる客観的表象でもなく、感覚には空間に関する直観も時間に関する直観も見出されない」(B208)とカントは述べている。『プロレゴメナ』にも同様の記述が見られる。IV, 309を参照。

<sup>14</sup> 例えば次のような記述がある。「経験的直観の未規定な対象は現象と呼ばれる」(A20/B34)。

<sup>15</sup> カントのこの議論を実質ある形で理解するためには、例えば正当な判断を下す際には主体がその対象を特定できる必要があり、その際には時間空間的特定が重要であることを示す議論のような、判断の真偽に関わるものとして対象を考えると対象の時間空間的特定とを架橋する議論が必要である。しかし本稿では紙幅の関係もあり、ひとまず直観と感覚の区別が判断能力を中心に据える彼の方針の帰結として形式的には理解されることを押さえるに留めておかざるをえない。

<sup>16</sup> 同様の指摘はGeorge (1981) を参照。

<sup>17</sup> 例えばワトキンスは感覚に関するこの考えが「解釈的にも哲学的にも特に難解」(Watkins 2010, n. 155) だとしている。

<sup>18</sup> McDowell ([2008] 2009, 119-21) を参照。

<sup>19</sup> A版ではこの箇所は「あらゆる現象においては感覚と、対象において感覚に対応する実在的

なもの（フェノメノンの実在性 (realitas phaenomenon)）はある内包量を、すなわち度をもつ（A166）となっている。以下では基本的に B 版の議論を取り上げるものの、A 版に関しても本稿の主張は変わらず維持できると考える。

<sup>20</sup> B207-8 が該当する。

<sup>21</sup> A169/B211 を参照。

<sup>22</sup> A173/B214 を参照。カントのこの区別の詳細には本稿は踏み込まないことにする。これについては例えば Giovanelli (2011, 9-16) などを参照。

<sup>23</sup> A168-9/B210 を参照。

<sup>24</sup> 実際にウェストファルはこうした考えを「予料」に読み込もうとしているように思われる。Westphal (2004, 44) を参照。

<sup>25</sup> PhB 版では、also bloß subjektive Vorstellung<sup>26</sup>となっているが、複数の訳本によればこれは、als bloß subjektive Vorstellung<sup>26</sup>の誤植である。本稿はこの指摘に従う。詳しくは有福 (2001, 481) および原 (1966, 444) などを参照。

<sup>26</sup> 先述のように恐らくカントが考えているこの対応関係は因果関係であると思われる。しかし残念ながら A168-9/B210 にあるように因果関係に関する把握の成立は「経験の類推」の主題であるとして、彼はこのことについてこれ以上「予料」で言及していない。

<sup>27</sup> ここではカントの実在性概念の多義性には踏み込まない。詳しくは檜垣 (1998) や Giovanelli (2011) を参照。

<sup>28</sup> ウェストファルはこのように理解していると思われる。Westphal (2004, 44) を参照。

<sup>29</sup> 檜垣 (1998, 62-3) や Giovanelli (2011, 19-25) を参照。

#### [参考文献]

カントからの引用はアカデミー版カント全集の巻数（ローマ数字）と頁数（アラビア数字）で記す。ただし『純粹理性批判』に関しては慣例に従い第 1 版を A、第 2 版を B として記す。なお引用文中の傍点箇所は基本的に原文ゲシュペルトであり、[] 内は引用者による補足である。カントの著作は以下のものを参照し、誤植の指摘に際しては以下の訳本を参考にした。

Kant, Immanuel. 1998. *Kritik der reinen Vernunft*, Felix Meiner Verlag.

———. 2001. *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können*, Felix Meiner Verlag.

有福考岳. 2001. 『カント全集 4』, 岩波書店.

原佑. 1966. 『カント全集・第 4 巻』, 理想社.

それ以外の参考文献は以下のようになっている。

Allison, Henry E. 2004. *Kant's Transcendental Idealism*, Revised and Enlarged Edition, Yale University Press.

George, Rolf. 1981. "Kant's Sensationism," *Synthese*, 7, 229-55.

Giovanelli, Marco. 2011. *Reality and Negation-Kant's Principle of Anticipations of Perception: an Investigation of its Impact on the Post-Kantian Debate*, Springer.

檜垣良成. 1998. 『カント理論哲学形成の研究—「実在性」概念を中心として—』, 溪水社.

黒積俊夫. 1992. 『カント批判哲学の研究—統覚中心的解釈からの転換—』, 名古屋大学出版会.

Langton, Rae. 1998. *Kantian Humility: Our Ignorance of Things in Themselves*, Oxford University Press Inc.

McDowell, John. (2008) 2009. "Sensory Consciousness in Kant and Sellars," in *Having the World in View: Essays on Kant, Hegel, and Sellars*, Harvard University Press, 108-26.

Watkins, Eric. 2010. "The System of Principles," in *The Cambridge Companion to Kant's Critique of Pure Reason*, Paul Guyer, Cambridge University Press, 151-67.

Westphal, Kenneth R. 2004. *Kant's Transcendental Proof of Realism*, Cambridge University Press.